

コラム4 市域の拡張

電力、鉄道などのインフラは、生産基盤という側面も持つとともに、生活基盤という側面も持つ。震災前、既に飽和状態にあったとされる東京市の人口は、震災によって1920（大正9）年を100として1925（大正14）年には91まで減少した。しかし、隣接5郡町村、すなわち北豊島、南足立、南葛飾、荏原、豊多摩では、1925（大正14）年で176、1930（昭和5）年で246と爆発的に増加している。一方、市部は同年でも95までしか戻っていない。

コラム表4-1 関東大震災前後の人口変動

	大正9年		大正14年		昭和5年	
	人口	指数	人口	指数	人口	指数
東京市	2,173,201	100	1,995,567	91	2,070,913	95
周辺5郡計	1,177,018	100	2,103,851	178	2,899,926	246
総計	3,350,219	100	4,099,418	122	4,970,839	150

出典：「東京百年史」，ぎょうせいより作成

5郡町村で人口増加が著しかったのは荏原郡荏原町で、1920（大正9）年から1930（昭和5）年までの10年間で15.5倍になった。蒲田など周辺地域でも同様の傾向が見られ、第2章第1節で述べた目蒲電鉄による目黒、蒲田間（1923（大正12）年12月）、大岡山、二子玉川間（1929（昭和4）年12月）の営業開始が人口増に寄与していると推察される。荏原町に次いで人口増加が著しかったのは、豊多摩郡杉並町で14倍、北豊島郡尾久町の9.7倍である。さらに、南葛飾郡、南足立郡でも3～4倍の急増地域がある（東京百年史，p. 554-560）。